

第32回 「歯科医学を中心とした総合的な  
研究を推進する集い（平成28年度）」

抄 録

日 本 歯 科 医 学 会



# ま え が き

学問、研究は、狭い分野の中だけでいかに努力しても、その発展には限界があります。歯科医学をより発展させるためには、分化した各専門領域の間で情報を交換し、交流の輪を広げることが必要であります。

そこで、科学情報も多岐にわたる中、臨学産協同をふくめた学際分野との交流を通して、互いのジャンルを超えた研究者が協同してグループをつくり、異なる視点から新しい要素を加え、研究の活性化をはかるならば、そこには素晴らしい研究成果が期待されます。

このような観点から、今年度も大きな、幅広い構想を持っておられる研究者の方々に発表の場を設け、参会者と自由に意見を交換し、同志を募るということを目的として、第32回の「集い」を開催することになりました。今年度の「集い」も、発表と質疑に加えて、発表者と参会者との十分な討論が行えるよう、ポスター掲示を行うことといたしました。

この集いが、形式にこだわらない自由な雰囲気の中で、フランクに意見を交換する場となりますよう、今回は次の形式で行いますので、皆様のご協力をお願いいたします。

- ① 口演 15分の後、質疑応答 10分
- ② 同演題についてのポスターディスカッション

午前、午後の部の全プログラム終了後 8題について

## 第 32 回「歯科医学を中心とした総合的な研究を推進する集い」日程

日時 平成 28 年 9 月 3 日 (土) 午前 10 時

場所 歯科医師会館 1 階大会議室  
(東京都千代田区九段北 4-1-20)

主催 日本歯科医学会

- 
- 10:00 ~ 10:10 **開 会 式**  
[司 会] 日本歯科医学会学術研究委員会副委員長 岡 田 智 雄  
開会の辞 日本歯科医学会学術研究委員会委員長 天 野 敦 雄  
挨拶 日本歯科医学会会長 住 友 雅 人  
経過報告 日本歯科医学会常任理事 山 本 照 子
- 
- 10:10 ~ 10:25 **1. 光学機器による口腔粘膜疾患の解析**  
演者: 森 川 貴 迪 (東京歯科大学千葉病院 口腔顎顔面外科学講座)  
10:25 質 疑 応 答  
座長: 奈 良 陽 一 郎 (日本歯科医学会学術研究委員会委員,  
日本歯科大学生命歯学部教授)
- 
- 10:35 ~ 10:50 **2. 歯科領域への超音波ガイド下神経ブロック導入による疼痛管理法の開発**  
演者: 松 村 朋 香 (東京医科歯科大学 麻酔・生体管理学分野)  
10:50 質 疑 応 答  
座長: 宮 脇 卓 也 (日本歯科医学会学術研究委員会委員,  
岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授)
- 
- 11:00 ~ 11:15 **3. 紫外線 LED を用いた歯科治療用機器開発**  
演者: 角 保 徳 (国立長寿医療研究センター  
歯科口腔先進医療開発センター)  
11:15 質 疑 応 答  
座長: 荒 木 孝 二 (日本歯科医学会学術研究委員会委員,  
東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科  
教授)
- 
- 11:25 ~ 11:40 **4. NR4A1 を標的とした薬物性歯肉増殖症の新規治療法の開発**  
演者: 松 田 真 司 (広島大学大学院医歯薬保健学研究院  
応用生命科学部門 歯周病態学研究室)  
11:40 質 疑 応 答  
座長: 天 野 敦 雄 (日本歯科医学会学術研究委員会委員長,  
大阪大学大学院歯学研究科教授)
- 
- 11:50 ~ 12:05 **5. ヒト iPS 細胞に低酸素培養を応用した再生医療用骨組織の作製**  
演者: 大 川 博 子 (東北大学大学院歯学研究科  
分子・再生歯科補綴学分野)  
12:05 質 疑 応 答  
座長: 上 條 竜 太 郎 (日本歯科医学会学術研究委員会委員,  
昭和大学歯学部教授)
-

---

12:15 ~ 13:15 〈休 憩〉

---

13:15 ~ 13:30 6. 高感度 X 線画像センサーでの連続撮影による、リアルタイム透視根管形成システム

演者：石 幡 浩 志（東北大学大学院歯学研究科）  
13:30 質 疑 応 答  
座長：新 井 嘉 則（日本歯科医学会学術研究委員会委員，  
日本大学歯学部特任教授）

---

13:40 ~ 13:55 7. 高齢期における認知機能障害と歯周病との関連を検証することを目的とした大規模前向きコホート研究：藤原京スタディ

演者：岡 本 希（奈良県立医科大学医学部医学科  
地域健康医学講座）  
13:55 質 疑 応 答  
座長：岡 田 智 雄（日本歯科医学会学術研究委員会副委員長，  
日本歯科大学附属病院教授）

---

14:05 ~ 14:20 8. 総合病院の入院患者が入院中に発症する肺炎に関する多施設共同研究—医科入院患者約 40 万人の解析—

演者：倉 沢 泰 浩（武蔵野赤十字病院 特殊歯科口腔外科）  
14:20 質 疑 応 答  
座長：依 田 哲 也（日本歯科医学会学術研究委員会委員，  
埼玉医科大学教授）

---

14:30 ~ 15:10 ポスターディスカッション

---

15:10 閉 会 の 辞 日本歯科医学会副会長 松 村 英 雄

---

# 1. 光学機器による口腔粘膜疾患の解析

○森川 貴迪 柴原 孝彦

(東京歯科大学／千葉病院／口腔顎顔面外科学講座)

座長 奈良陽一郎 (日本歯科医学会学術研究委員会委員,  
日本歯科大学生命歯学部教授)

## ①研究の背景 (これまでの実績を含む) と目的

わが国における口腔がんは年々増加傾向にある。口腔がんは、周囲に上皮異形成を伴うことが多く、field cancerization と呼ばれる。そのため口腔がんの診断や切除範囲の設定に苦慮することが多い。当科ではこれまで、生体染色や光学機器を用いた切除範囲の設定について報告してきた。生体染色では軽度の侵襲があり、アレルギーの場合や歯肉・口蓋などの角化傾向が強い扁平上皮では描出が困難である。また染色後、口腔粘膜の微細な色調の変化を捉え難いという欠点がある。光学機器では 400~460 nm の青色光を照射し、反射光を観察する。正常組織では自家蛍光により蛍光可視が保持される (Fluorescence Visualization Retention : FVR) のに対し、上皮異形成ではコラーゲン架橋構造の破壊により自家蛍光が低下し、蛍光可視の低下が起こる (Fluorescence Visualization Loss : FVL)。この光学機器では患部に非接触性であり侵襲は伴わず、また繰り返し行うことが可能である。

本研究では、光学機器を中心に蛍光物質などの病態解析や生体染色との違いなどにより、“腫瘍の可視化”を目指し、さらには治療成績ならびに QOL の向上を目的とする。

## ②研究内容の斬新性

口腔がんの切除範囲の設定における光学機器での研究は、世界的にほとんど報告はない。その評価には視覚的評価のみである。本研究では色調の変化を捉え、画像解析を行うことにより、定量的評価を目指しており、斬新である。また、蛍光物質に着目し、解析を行うことで分子病理学的な解析が可能である。

## ③研究の発展性・進展性

口腔がんのスクリーニングとして有用である。特にハンディタイプの開発により歯科医院のチェアや訪問診療等に用いることが可能である。

本研究により生体染色と光学機器との関係性が明らかにすることで、腫瘍の病態把握がつながると考える。多施設の共同研究を行い、治療に直結することで、治療成績の向上、QOL の維持に貢献できる可能性が大である。病態解析により蛍光物質に関わる新規 Biomarker の解析につながる可能性がある。また、新規光学口腔がん診断機器の開発にもつながると考える。さらには、口腔に留まらず咽頭や食道、胃、大腸などの病態把握に役立つ可能性がある。

## ④関連領域とのグループ形成の有用性

病態把握のために病理・病態学との連携は必要不可欠である。光学機器により画像解析し、色彩学・光線力学を要する。新規医療機器の開発にもつながり医療工学に貢献できると考える。

希望する協力分野：病理学、病態学、放射線学、医療工学

## 2. 歯科領域への超音波ガイド下神経ブロック導入による疼痛管理法の開発

○松村 朋香 久保田 一政 深山 治久

(東京医科歯科大学／麻酔・生体管理学分野)

座長 宮脇 卓也 (日本歯科医学会学術研究委員会委員,

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科教授)

### ①研究の背景 (これまでの実績を含む) と目的

近年の超音波画像機器の性能向上により、これまでランドマーク法で行われていた四肢・体幹の末梢神経ブロックに超音波画像機器が使用されるようになってきた。この方法は局所解剖を確認しながら穿刺できることから安全で成功率の高い末梢神経ブロックが可能となった。

歯科領域でも下顎孔伝達麻酔などの神経ブロックは長時間効果が持続し、炎症等で浸潤麻酔が奏功しにくい症例にも有効であるにも関わらず、神経損傷や血管への誤穿刺などの偶発症の発生率が高く、神経ブロックの施行を敬遠する歯科医師も多い。

一方で全顎におよぶ長時間の局所麻酔下手術では、浸潤麻酔だけでは疼痛コントロールに難渋する症例も増えており、確実な術中鎮痛が望まれている。

本研究では、歯科領域に超音波ガイド下神経ブロックを導入し、安全性が高く確実に痛みをコントロールすること、口腔内での使用に適した超音波プローブを開発することが目的である。

### ②研究内容の斬新性

これまで、口腔内への超音波ガイド下神経ブロックはほとんど報告されていない。さらに本研究では狭い口腔内でも操作性が良好なプローブの開発を目指しており、研究内容は斬新である。

### ③研究の発展性・進展性

医科領域では超音波画像機器により、神経ブロックへの門戸が広く開かれた。歯科領域も、多くの歯科医師が超音波ガイド下神経ブロックを行うことで、より確実な鎮痛がなされれば、患者の苦痛を軽減し疼痛が引き起こす全身的偶発症の発生も予防できることから、歯科医療の安全性向上に貢献できると考えられる。

また、本研究では小型で口腔内を描出するのに適し、将来的には歯科診療室のチェアサイドで容易に使用できるような超音波画像機器の開発も目指している。

### ④関連領域とのグループ形成の有用性

超音波ガイド下ブロックに熟達した麻酔科医師による技術提供を希望している。また、歯科放射線学と解剖学の各専門家の見地からアドバイスをいただき、ブロック針の刺入部位・方向などを慎重に検討したい。

また、小型超音波画像機器の開発のために、医工学と産学官連携を含めたつながりが必要と考えている。

---

希望する協力分野：麻酔科学，歯科放射線学，解剖学，医工学

### 3. 紫外線 LED を用いた歯科治療用機器開発

○角 保徳

(国立長寿医療研究センター／歯科口腔先進医療開発センター)

座長 荒木 孝二 (日本歯科医学会学術研究委員会委員,  
東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科教授)

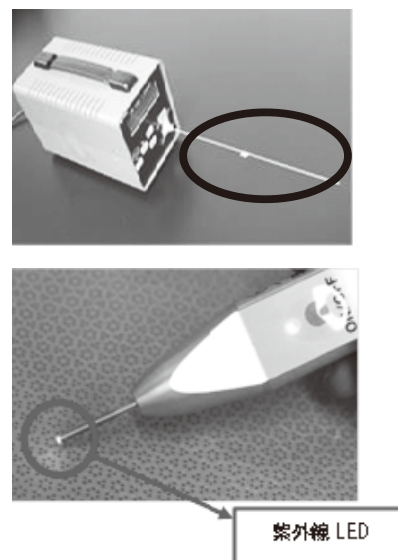
#### ①研究の背景 (これまでの実績を含む) と目的

発光 LED の新結晶素子開発は我が国が優位な世界的な最先端技術であり、名古屋大学天野 浩教授 (青色 LED の開発にて平成 26 年ノーベル賞受賞) らにより紫外線 LED が開発された。

国立長寿医療研究センターは産官共同開発により、平成 23 年に紫外線 LED 口腔治療装置試作 1 号機、平成 25 年に 2 号機 (中心波長 254 nm) を導入し、基礎実験を施行した結果、臨床応用に十分な出力であることが判明した (右図: 丸が直線的な石英ファイバー)。

紫外線は通常の光ファイバーを透過できず、石英ファイバーのみを透過するので、ファイバーを使った胃カメラ、大腸ファイバーなどの医療機器に紫外線を用いることができなかった。その解決策として、治療機器の先端に紫外線 LED を直接装備し、口腔内に直接紫外線を照射できる装置を開発した (右図)。本開発で将来的に胃カメラ、大腸ファイバーなどの医療機器に紫外線を用いることが可能となった。

本研究では、日本発、世界初の紫外線 LED 口腔治療装置の開発を目指す。



#### ②研究内容の斬新性

歯科口腔先端診療開発部ではいち早く紫外線 LED の医療応用への可能性に着眼し、平成 22 年 5 月より天野グループの企業にコンタクトを続けてきた。歯科口腔先端診療開発部が導入した紫外線 LED は、企業が初めて外部に提供したものである。既に、紫外線 LED 口腔治療装置の試作機が完成し、他の追随を許さない。

#### ③研究の発展性・進展性

従来の方法に比較し紫外線の強力なスポット照射が可能となり、紫外線 LED を用いた歯科治療用機器が開発されれば極めて有効な口腔内治療機器となることが期待される。紫外線 LED は、口腔のみならず医療全般に応用範囲が広い世界最先端技術であり、まずは口腔分野で機器開発を進め、将来的には医療全般に広げる予定である。

#### ④関連領域とのグループ形成の有用性

紫外線 LED 口腔治療装置は歯周病、歯内療法、癌治療など口腔各分野に応用が可能である。さらに、口腔のみならず医療全般に応用範囲が広い世界最先端技術であり、関連領域とのグループ形成は極めて有効である。

希望する協力分野：口腔外科分野、歯周病分野、歯内療法分野、癌治療分野、粘膜疾患治療分野



## 4. NR4A1 を標的とした薬物性歯肉増殖症の新規治療法の開発

○松田 真司 岡信 愛 加治屋 幹人 藤田 剛 栗原 英見

(広島大学大学院医歯薬保健学研究院／応用生命科学部門／歯周病態学研究室)

座長 天野 敦雄 (日本歯科医学会学術研究委員会委員長,  
大阪大学大学院歯学研究科教授)

### ①研究の背景 (これまでの実績を含む) と目的

薬物性歯肉増殖症はカルシウム拮抗薬、抗てんかん薬フェニトイン、免疫抑制薬シクロスポリンを内服する患者に見られる副作用で、歯肉の肥厚を特徴とした歯周疾患である。高齢化や医学の発展に伴い上記薬剤を服用する患者は増加している。またシクロスポリンはその適応症の拡大から歯肉増殖症の患者も増加すると予想される。現在薬物性歯肉増殖症の治療法は薬の変更、歯肉切除であるが、薬の変更や減量が困難なケースや歯肉切除後の再発も稀ではない。従来の治療法に替わる新規治療法の開発は患者の恩恵が大きい。そのためには薬物性歯肉増殖症のメカニズムを詳細に解明する必要がある。近年、核内受容体 NR4A1 の機能障害が TGF- $\beta$  シグナルを促進させることで全身の線維症を増悪させていることが明らかになった。薬物性歯肉増殖症も薬剤によって歯肉組織中の NR4A1 の機能障害が起き、歯肉を肥厚させていると仮説した。以上の点に着目し、薬物性歯肉増殖症のメカニズムを詳細に解明し、新規治療法を開発することを目的とした。

### ②研究内容の斬新性

これまでに申請者はシクロスポリンに誘導されるマウス歯肉増殖症モデルを作製しており、腫脹した歯肉組織を採取し、分子・遺伝子レベルでの解析を可能としている。また歯科領域では稀である疾患の原因分子を特定し、それを標的とした治療法を開発を目指している点が本研究の斬新な点である。

### ③研究の発展性・進展性

本研究でシクロスポリン誘導性歯肉増殖症のメカニズムが解明されれば、薬理作用の異なるフェニトインとニフェジピンで誘導される歯肉増殖症のメカニズム解明にもつながる。またシクロスポリンのその他の副作用の腎臓の線維化や多毛症などのメカニズム解明にもつながる可能性がある。

### ④関連領域とのグループ形成の有用性

薬剤の作用、構造に精通しているグループと共同研究が行うことができれば、薬物性歯肉増殖症のメカニズム解明を違う視点から検討でき、新規治療法の開発のためにはその知識や技術が有用と考える。

---

希望する協力分野：薬学系分野

## 5. ヒト iPS 細胞に低酸素培養を応用した再生医療用骨組織の作製

○大川 博子 江草 宏

(東北大学大学院歯学研究科／分子・再生歯科補綴学分野)

座長 上條 竜太郎 (日本歯科医学会学術研究委員会委員,  
昭和大学歯学部教授)

### ①研究の背景 (これまでの実績を含む) と目的

既存の歯科材料では安定した骨増生の達成が困難な症例では、細胞を用いた新たな骨増生技術に期待が寄せられている。我々は、マウス iPS 細胞の骨芽細胞分化誘導法を確立し (Egusa et al., 2014), この細胞から作製した三次元の骨様構造体が著明な骨形成能を有するという知見を得ている (Okawa et al., 2016)。しかしながら、マウスとヒトでは動物種が大きく異なるため、ヒト iPS 細胞に応用するには、分化誘導条件をさらに検討し、生体内に近い環境を試験管内で再現する必要がある。我々は、生体内の低酸素状態を模倣することで、骨芽細胞分化に有利に働く可能性に着目した。本研究では、低酸素培養下でヒト iPS 細胞の骨芽細胞分化を促進する分化誘導法を応用した、新規歯槽骨再生技術の開発を目的とする。

### ②研究内容の斬新性

我々がマウス iPS 細胞から作製した構造体は、石灰化したコアを、骨芽細胞を含む骨様組織が覆った二層構造を有する (図 1)。本研究の斬新性は、iPS 細胞の万能性を利用して骨組織様の細胞構造体を作製し、これを骨移植材として用いようとする点にある。また、ヒト iPS 細胞の分化誘導過程で生体内の低酸素環境を模倣することで、分化・発生を模した組織形成を得ようとする試みも新しい。

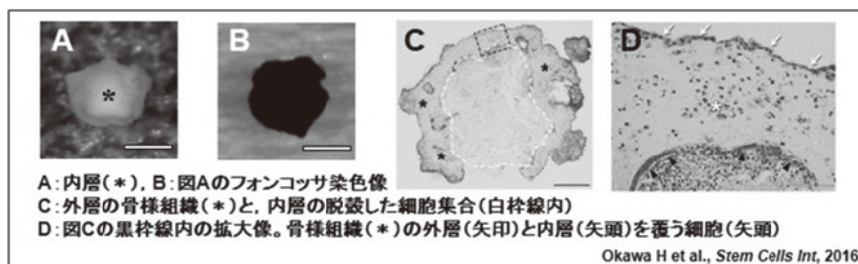


図 1 マウス iPS 細胞から作製した骨様構造体

### ③研究の発展性・進展性

低酸素状態が、iPS 細胞の骨芽細胞分化を促進すれば、骨芽細胞分化機序の解明に繋がる可能性がある。また、本研究は、iPS 細胞の骨芽細胞分化機構を考慮した新規の骨再生材料の開発に繋がることが期待され、歯科領域にとどまらない多方面の再生医療・自然科学の発展に貢献する可能性が考えられる。

### ④関連領域とのグループ形成の有用性

本研究の遂行にあたり、ヒト iPS 細胞の低酸素培養法や構造体の作製方法について、分子生物学、生体組織工学領域の研究者との連携が有用である。

希望する協力分野：分子生物学、生体組織工学

## 6. 高感度 X 線画像センサーでの連続撮影による、リアルタイム透視根管形成システム

○石幡 浩志<sup>1)</sup> 青木 徹<sup>2)</sup> 小池 昭史<sup>3)</sup> 櫻井 栄男<sup>4)</sup> 佐々木 啓一<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>東北大学大学院歯学研究科,

<sup>2)</sup>静岡大学／電子工学研究所,

<sup>3)</sup>株式会社 ANSeeN,

<sup>4)</sup>株式会社アクション・ジャパン)

座長 新井 嘉則 (日本歯科医学会学術研究委員会委員,  
日本大学歯学部特任教授)

### ①研究の背景 (これまでの実績を含む) と目的

Ni-Ti ファイルによる彎曲根管形成の省力化が図られる一方で、デモの透明根管で示される迅速な形成が、天然歯の根管で再現できるのか。しかしその検証は X 線スチルや断面観察から推測するしかなかった。

CdTe 半導体 X 線受線センサーは、デンタルフィルムの数百倍の感度と、高解像度を有し、フィルム 1 枚分の線量で 100 フレーム以上の連続撮影を可能とする。我々は、天然歯の根管内に挿入されていくファイルを動画で透視するシステムを開発し、屈曲した根管のパスファインドにおけるファイル先端の挙動を観察、根尖までの穿通を困難とする様々な要因を解明した。

### ②研究内容の斬新性

先端径が 100  $\mu\text{m}$  (# 10) のファイルを検知できる画像センサーの画素はミクロンレベルが要求され、現在のデジタル X 線センサーでは検知が難しい。そこで、ピンホール線源による直接拡大法を利用した。この場合、X 線は放射状に拡散し、被写体から受線センサーに達する線量が微弱となるものの、高感度の CdTe 素子なら造影できる。結果として被写体への照射量が低減され、動画撮影ながら、従来の静止画像撮影法と同等の被ばく量に抑える事が可能であった。

### ③研究の発展性・進展性

患者の根管形成や根管充填をリアルタイムで可視化でき、当然、歯内療法の精度は格段に向上するに違いない。患者の被ばく線量はフィルム 1 枚分で済むから安全性にも懸念は無い。一方で、ハンドインストルメントで行う限り、術者への被ばくが避けられない。よって本法は、近年開発が進む手術支援ロボットとの併用が効果的と考えられる。我々は、現状の Ni-Ti ファイル自動根管形成をリモート操作するシステムを検討している。

### ④関連領域とのグループ形成の有用性

本技術の確立と臨床応用には、センサー画素の高精細化のための半導体と画像処理技術を含む電子工学分野、および根管形成のリモート操作のためのロボットを念頭とした機械工学分野とのコラボレーションが有用である。

希望する協力分野：放射線診断学、歯内療法学、電子工学、機械工学

## 7. 高齢期における認知機能障害と歯周病との関連を検証することを目的とした大規模前向きコホート研究：藤原京スタディ

○岡本 希<sup>1)</sup> 森川 将行<sup>2)</sup> 須崎 康恵<sup>3)</sup> 水野 文子<sup>4)</sup> 小松 雅代<sup>5)</sup>  
天野 信子<sup>6)</sup> 高澤 伸<sup>7)</sup> 車谷 典男<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 奈良県立医科大学／医学部医学科／地域健康医学講座,

<sup>2)</sup> 三重県立こころの医療センター,

<sup>3)</sup> 奈良県立医科大学／女性研究者支援センター,

<sup>4)</sup> 奈良県立医科大学／微生物感染症学講座,

<sup>5)</sup> 奈良県立医科大学／公衆衛生看護学講座,

<sup>6)</sup> 甲南女子大学／理学療法学科,

<sup>7)</sup> 奈良県立医科大学／生化学講座)

座長 岡田 智雄 (日本歯科医学会学術研究委員会副委員長,  
日本歯科大学附属病院教授)

### ①研究の背景（これまでの実績を含む）と目的

申請者は、多数の歯が残っている者に比べ、歯が全く残っていない者では軽度認知機能障害のリスクが2.4倍に、認知症領域のリスクが2.2倍に上昇することを見出した (Okamoto N, et al. Brain Res 2012; Okamoto N, et al. Behav Brain Func 2010; Okamoto N, et al. J Alzheimers Dis 2015)。成人期および高齢期の多数歯欠損の主原因は歯周病であるため、歯周病と認知機能との間に関連があると推測する。認知症関連遺伝子と歯周病の重複によって認知機能障害の発生リスクをさらに上昇させる可能性があるが、申請者らの先行研究では認知症関連遺伝子を解析していないため、検討できていない。したがって本研究では、認知症関連遺伝子と歯周病の重複効果を検証する。

本研究では、平成24年の調査データをベースラインとし、追跡5年目の平成29年健診で軽度認知機能障害と認知症領域の新規発生を把握する。平成24年の健診で取得済みデータ（歯科健診データ、認知機能検査データ、病歴、服薬状況、生活習慣、ADL、抑うつなど）と平成28年度に解析する認知症関連遺伝子APOE4を説明変数とし、平成29年の認知機能障害の新規発生を結果指標とする。対象者は奈良県内の地域在住高齢者2000名（平均80歳）である。

### ②研究内容の斬新性

歯周病の炎症の負荷と認知機能障害との関連についてのヒトを対象とした研究をリードしているのはStein PSとKamer ARである。国内では、小規模の疫学研究が散見されるものの、申請者らの大規模前向きコホート研究に匹敵するものはない。

### ③研究の発展性・進展性

1. 歯周病予防によって、高齢期における認知機能障害の発生時期を遅らせることができれば、認知症関連の医療費および介護費用を抑制できる。
2. 本研究は地域住民を対象としているため、得られた結果を一般化できる。

### ④関連領域とのグループ形成の有用性

心理学専攻グループが精神機能検査を実施し、口腔細菌学、歯周病学、口腔生理学の研究者が歯周病（あるいは咀嚼機能）と認知機能障害の関連メカニズムを解明し、社会学の研究者が研究成果を普及させれば、研究目的を達成できる。

希望する協力分野：口腔細菌学、歯周病学、口腔生理学、心理学（精神機能検査）、社会学

## 8. 総合病院の入院患者が入院中に発症する肺炎に関する多施設共同研究—医科入院患者約40万人の解析—

○倉沢 泰浩<sup>1)</sup> 道脇 幸博<sup>1)</sup> 向山 仁<sup>2)</sup> 関谷 秀樹<sup>3)</sup> 小林 裕<sup>4)</sup>  
丸岡 豊<sup>5)</sup> 重松 司朗<sup>6)</sup> 陸川 良智<sup>7)</sup> 長谷川 士朗<sup>8)</sup> 唐木田 一成<sup>9)</sup>  
根岸 明秀<sup>10)</sup> 石井 良昌<sup>11)</sup> 大橋 勝<sup>12)</sup> 坂田 康彰<sup>13)</sup> 杉崎 順平<sup>14)</sup>  
植野 正之<sup>15)</sup> 村上 正泰<sup>16)</sup>

- (<sup>1)</sup> 武蔵野赤十字病院／特殊歯科口腔外科,  
<sup>2)</sup> 横浜市立みなと赤十字病院／歯科口腔外科,  
<sup>3)</sup> 東邦大学医療センター大森病院／口腔外科,  
<sup>4)</sup> 東京都立広尾病院／歯科口腔外科,  
<sup>5)</sup> 国立国際医療研究センター病院／歯科口腔外科,  
<sup>6)</sup> 東京都多摩総合医療センター／歯科口腔外科,  
<sup>7)</sup> 公立昭和病院／歯科・歯科口腔外科,  
<sup>8)</sup> 公益財団法人東京都保健医療公社／荏原病院／歯科口腔外科,  
<sup>9)</sup> 東海大学八王子病院／歯科・口腔外科,  
<sup>10)</sup> 国立病院機構横浜医療センター／歯科口腔外科,  
<sup>11)</sup> 海老名総合病院／歯科・口腔外科,  
<sup>12)</sup> 東京高輪病院／歯科口腔外科,  
<sup>13)</sup> 埼玉医科大学国際医療センター／歯科・口腔外科,  
<sup>14)</sup> 国家公務員共済連合会／虎の門病院／歯科,  
<sup>15)</sup> 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科／健康推進歯学分野,  
<sup>16)</sup> 山形大学医学部／医療政策学講座)

座長 依田 哲也（日本歯科医学会学術研究委員会委員，埼玉医科大学教授）

### ①研究の背景と目的

周術期口腔機能管理は誤嚥性肺炎の予防に効果があるが、そのことの社会的な意義はなお明らかにされていない。本研究の目的は入院後に肺炎を発症した患者の特徴を把握し、投入された医療資源を調査することで、医科入院患者の肺炎発症予防に対する歯科の重要性を医科及び社会全体に広く周知することである。

### ②研究内容の斬新性

本研究は以下の点で従来の臨床疫学研究と異なっている。

- ①病院規模、設備といった医療資源や患者数、治療対象となる疾患などが同一の地域中核病院のデータで背景がほぼ統一されていること。
- ②他に例を見ない大規模なデータ（調査対象約43万人）を収集していること。
- ③調査項目が疾患構造や治療概要から収益、入院期間などの医療経済に関することにまで及ぶこと。

### ③研究の発展性・進展性

本来、入院中の肺炎の併発はゼロであるべきであるが、総数433,450人の入院患者のデータ解析では、入院後肺炎発症者数は6,996人、入院後の肺炎発症率は1.6%（0.4%～2.1%）であった。疾患ごとの分析のうち例えば、脳卒中の入院患者は15,169人、入院後肺炎発症者数は781人で入院後肺炎発症率は5.1%であり、より高頻度に肺炎を発症することが明らかになった。また入院後の肺炎発症の有無で在院日数を比較すると入院後肺炎を発症しなかった患者が約23日、入院後肺炎を発症した患者が約52日で在院期間は大幅に延長することも明らかになった。脳卒中は周術期口腔機能管理が必要とされる疾患に含まれておらず、本研究結果は施策提言のための根拠になると考えられ、今後医科入院患者に対する支持療法としての歯科の必要性和医療経済学的視点からの歯科の役割の見直しに役立つと考えられる。

### ④関連領域とのグループ形成の有用性

調査した範囲では全ての診療科で肺炎を併発していた。入院中の肺炎発症は医科及び社会的にも大きな問題で歯科、医科、臨床疫学、医療経済、行政とのグループ形成が有用であると考えられる。

希望する協力分野：臨床歯科医学，臨床医学，臨床疫学，医療経済学

×E



Handwriting practice area with a solid top line, a solid bottom line, and multiple horizontal dashed lines for letter height guidance.

×E



A series of 20 horizontal dashed lines for writing, spanning the width of the page.

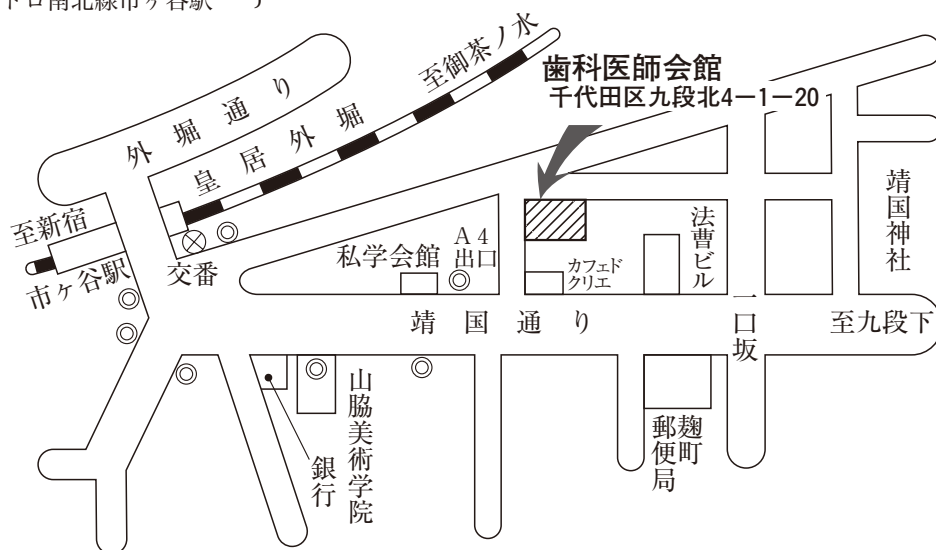


## <実施要領>

- 目的：学際的交流を通し，新しい研究分野の開拓と研究組織の結成を推進すること，また臨学一体の具現化を目的とする。
- 主催：日本歯科医学会
- 日時：平成 28 年 9 月 3 日（土）  
10：00 開会／10：10 午前の部／13：15 午後の部／15：10 閉会
- 会場：歯科医師会館 1 階大会議室（案内図は別掲）
- 参加費：無料
- 申込：不要
- その他：本集いは日歯生涯研修事業における「特別研修」の対象となる。  
（併せて個別演題毎の「受講研修」単位を最大 8 単位取得可能）
- お問い合わせ先：日本歯科医学会事務局  
〒 102-0073 東京都千代田区九段北 4-1-20(日本歯科医師会内)  
TEL 03(3262)9214 FAX 03(3262)9885  
E-mail jda-jads@jda.or.jp

## <会場案内図>

- JR 総武線市ヶ谷駅より徒歩 5 分
  - 都営地下鉄新宿線市ヶ谷駅
  - 東京メトロ有楽町線市ヶ谷駅
  - 東京メトロ南北線市ヶ谷駅
- ） A4 出口より徒歩 2 分



◎・・・地下鉄市ヶ谷駅各出口